

復興を支える人と地域の+α

濱口梧陵、堤防築堤の功績 ～地域を守る行動力～

1854年 安政南海地震・津波



熊野 享
KUMANO Toru

稲むらの火の館
館長

安政南海地震(1854年)の津波被害を受けた広村(和歌山県広川町)では、被災直後から住民が堤防を築き、昭和南海地震(1946年)の津波から市街地を守った。この住民の行動力はどのようにして培われたのか。また、地域の防災意識はいかに引き継がれているのか。

津波防災

濱口梧陵こりょうと言う人物、今まではそんなにメジャーというわけではなかった。しかし最近、ボツボツと有名になりつつあるのは確かである。その要因には三つある。

一つ目は、2011年3月の東日本大震災により津波防災の機運が増し、津波防災に活躍した梧陵の名がマスコミ等に取り上げられるようになったこと。二つ目は、2011年度より梧陵の堤防築堤の経緯が、小学5年生の国語の教科書に登場したこと。和歌山では全県下で採用され、全国の約6割で採用されている。三つ目は、11月5日が「津波防災の日」として2011年に制定されたこと。それは梧陵の「稲むらの火」の活躍で、「津波防災をなし得た記念日」だからである。

これにより、一躍梧陵の名が全国に届くようになったのである。私の勤める「稲むらの火の館」も来館者数が昨年より倍増し、しかも津波災害への危機感を持ち、津波防災について学習する家族連れや一般客が増えたのである。

稲むらの火

そもそも「稲むらの火」とは何なのか。舞台は広村(今の和歌山県広川町)で、江戸時代の1854年、襲来した津波から多くの村人を救ったという実話をもとにした物語である。それが1937(昭和12)年に尋常小学校第5学年用国語読本に採用された。

「地震が起こった。『これは、ただ事でない』と、いち早く津波が来ると察知した濱口五兵衛が、田んぼにある刈り取ったばかりの稲穂のついでに稲むらに

火をつけ、村人を高台に誘導して、400人全員の命を津波から守った」という内容である。

この物語の中で特に注目すべきは、「刈り取ったばかりの稲穂のついでに稲むらに火をつけた」というところである。「大事に大事に育てた大切なお米を燃やしていいの？ もったいない!」と思う心。しかし「いや、それよりも400人の村人の命を救うことの方が大事である」という人命尊重の教えがここにある。当時の小学生が読んだ時、カルチャーショックを受けながら学習したのではないかと想像に難くない。この五兵衛のモデルとなっているのが、ヤマサ醤油7代目当主の濱口儀兵衛、すなわち濱口梧陵である。

事实は、梧陵が村人を高台にある広八幡神社の方に誘導し、自身は危うく津波にのみ込まれそうになりながらも広八幡神社にたどり着いた時、まだ逃げ遅れた村人がいると知り搜索に出るが、道は流木で



図1 『安政聞録』。古田庄右衛門が安政4年に大津波の実況を文章と絵で著した資料

ふさがっている。そして暗闇がせまる中、田に積んでいた稲むら(稲穂はついていない)に火を放ったのである。「稲むらの闇夜を照らす道明かり」。すなわち、道明かりとして闇夜を照らし、逃げ遅れていた村人に逃げる方向を知らせ、9人の命が救われたのである。

このような梧陵の機転もあり、村の人口1,323人の内97%の人が助かった。現在の研究によると、当時の状況では、5mの津波が押し寄せると、60%の人が亡くなると考えられている。この97%は奇跡に近いことと分析されている。

その後、地響きが続く中、天災の恐ろしさを嫌と言うほど感じた梧陵は気丈に行動する。人々を慰め励ますことに努め、一方で、その日食べる米を隣村のお寺で借り、握り飯にして避難所へ配分した。しかし幾日も支給することが出来ないと考え、隣村の庄屋に行き、状況を説明して蔵米50石を借り受けた。

避難所は広八幡境内と隣村のお寺を充てていたが、地面に畳を並べ、戸障子で囲っているだけの野宿である。梧陵はこの時の気持ちを手記に書いている。「老人や幼児が膝を抱えて座っているつらさや離散の状況は、とても悲しい思いをさせる。自分の身を殺して人を救済することは、こうした状況であれば、誰でも痛ましいと思う気持ちで奮い立たずにはいられないだろう。『濱口梧陵小傳』より)。これでは雨露をしのぐことは出来ないから、すぐにまた隣村の庄屋に行き、仮小屋建設を依頼している。

広村堤防築堤

濱口梧陵を語る時、広村堤防築堤を抜くことはできない。「稲むらの火」の活躍だけでは今のよう、大きな尊敬と敬愛を集めることはなかったのではない。

1854(安政元)年11月に起こった安政南海地震での大津波の時、梧陵は自らも被災しながら、村人救出に尽力した。そして広村の惨状を目の当たりにした時、私財をなげうって広村復興を決意するのである。

しかし、村人の中には「仕事もない、もう恐くて住んでいられない」と村を去る人が出てきた。思案した梧陵は、今後永久に村人の安全と幸福を図るに



写真1 梧陵銅像(濱口梧陵記念館)



写真2 現在の広村堤防

は、津波を防ぐことのできる堅固な堤防をつくるしかないと奮い立った。「是れ此の築堤の工を起して、住民百世の安堵を図る所以なり」と広村堤防築堤を決断したのである。

梧陵の行動は早く、親類筋に「津波の恐ろしさに未だふるえている今こそ、村人が一体となり、心を込めて堤防を築くことができる。10年20年が経って、無事な世に誰が堤防を築こうとするだろうか。私の他に、誰かいると思うか。『燃えよ稲むらの火』より)」と協力を求めた。

そして紀州藩には「資金は私が持つので堤防づくりを許可願いたい」と上申し、しかも地震から約3ヶ月後の翌年2月には広村の住民に説明し、工事を開始しているのである。

これほど早く工事に踏み切ったのは、村人に仕事がなく生活が困窮している中で、堤防づくりという仕事を早く与えようと考えたからである。日々築堤に従事するもの約500人。老若男女を問わず、特に1日の労働が終われば、その都度日当を支払っている。そして、農繁期になれば一時工事を中止し、冬の閑散期にまた工事を再開するというように、融通をつけて工事を行っているため村人は大変喜び、一丸となってこの工事に取り組むことが出来たのである。

築堤の目的

実はこの堤防築堤には二つの大きな目的があった。一つは「津波防災」という目的で、もう一つは生活に苦しむ村人に職を与えたことである。すなわち、勤労によって報酬を受けるという形を取り、単なる慈善的救助からくる依存性を避けようとした、いわゆる「失業対策」という目的である。このようにして、広村永遠の安全を期そうしたのであった。この二つの目的で工事が成されたことに大きな意義があり、現

在の災害復興活動の手本となっているとも言われている。

また、比較的高率な年貢に困難を感じていた広村は、塩害にあった土地を堤防の敷地に利用して、課税対象から外すといったことも行っている。梧陵の実務家としての政治的手腕が発揮されている。ここには、梧陵の広村に対する思いや堤防築堤にかかる熱意を感じ取れる。ヤマサの当主であるという側面から、自分ならできるという確信があったのではないか。すなわち、すべてが梧陵の広村に対する郷土愛につながってくる。

その梧陵の熱意に村人が応えた。築堤工事が続く中、「この堤防は自分たちの手で仕上げるのだ」という自立した村人に変化していくのである。このことこそが、梧陵の望んだことであった。

しかし、堤防づくりは決して順調にいったわけではない。築堤工事開始後の10月、今度は江戸に直下型のマグニチュード6.9という地震が起こる。江戸の町は大火災で死者5千人以上。江戸に出していたヤマサの店は壊滅状態となった。これがきっかけとなり、築堤の資金提供をしていたヤマサの経営も苦しくな

った。しかし、梧陵は「広村堤防を完成させる」と決断し、ヤマサの職人は一丸となり醤油造りを行った。その後、ヤマサの経営も順調に回復し、広村堤防完成に至るのである。

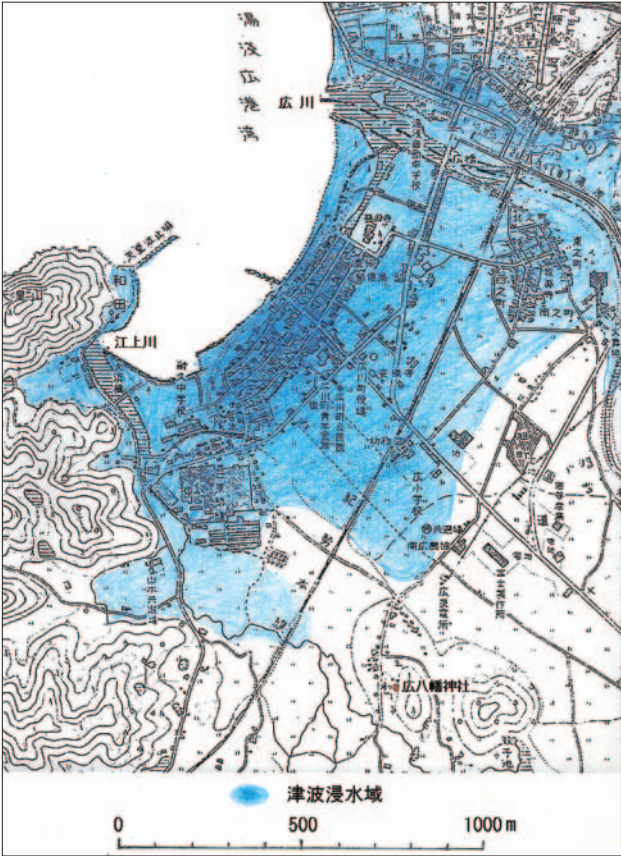
そして、安政南海地震からおよそ90年後の1946(昭和21)年、昭和南海地震による津波から集落を守ったのである。

梧陵の生い立ち

しかし、梧陵はどうして巨額の費用のかかる築堤を始め、広村復興にこだわったのであろうか。それは、梧陵の広村に対する深い郷土愛であろう。そのことを探るには、梧陵の生い立ちを知る必要がある。

梧陵の実家はヤマサ醤油の分家で、3代目七右衛門の長男として生まれる。梧陵が2歳の時、父七右衛門が22歳で亡くなり、以来、母しんの手で育てられる。

転機が訪れたのは12歳の時で、母元を離れ本家の養子として迎えられ、家業を見習うため千葉の銚子に赴いた。濱口家の家憲^{かけん}は大変厳しくて質素であり、たとえ当主になる人であっても丁稚と同じ修行を



安政南海地震津波の浸水域



昭和南海地震津波の浸水域

両図とも羽鳥ほか(1983)の調査結果を参考に、昭和40年代の地図に概略の範囲を描いたものである。地図は、津波来襲時のものでも、現在のものでもないことに注意。(作製：津村健四朗)

図2 安政南海地震津波(1854年)と昭和南海地震津波(1946年)の浸水域図



写真3 醤油造りの家に生まれて



写真4 「稲むらの火祭り」で稲むらに火を放ち、それを眺める松明行列の人々

積むのである。「親を思う」「故郷を思う」気持ちは非常に強いものがあったと思われる。

実は、銚子のヤマサには、実の祖父^{かんぼ}灌圃がおり、大変よくできた方で教養深く、村人からも敬愛される人格者であった。梧陵は深くこの祖父を敬い、祖父も梧陵をととてもかわいがったと言う。梧陵の清く優れた人格というのは、この祖父灌圃の影響を受け育ったからと思われる。

また、梧陵は幼少より読み書きそろばんを習い、「論語」をも諳んじたと伝えられている。当時の学問と言えば儒学であり、儒学の思想が根付いていたのではないだろうか。梧陵がよく用いた言葉に「経世済民(人の身になって世の中を治め、民衆の苦しみを救う)」と言うのがあり、儒学の思想が心の根底にある。だからこそ、自らも被災し広村の惨状を目の当たりにした時、「広村は私が助けなくて誰が助ける」と広村復興に向けて尽力したのも、必然の流れであったと考える。

受け継がれる地域の行動力

・津浪祭

安政南海地震の大津波により犠牲となった人々の霊を慰め、かつ後世のために広村堤防を築いてくれた濱口梧陵や先人の遺業とその徳を偲び、50回忌の1905年に堤防への土盛りを始めたことが「津浪祭」の始まりである。防災意識の高揚と啓発を兼ねて、小中学生も式典に参加し土盛りを行っている。

・広村堤防保存会

1993(平成5)年に広村堤防大規模整備工事が行われたことで、翌年に「広村堤防保存会」が結成され、

表1 復興に掛かった費用(杉村広太郎『濱口梧陵小傳』より算出)

項 目	数 量	費 用
避難時に用意した米	50石、その後250俵 漁船28隻(漁具・鋏・鎌等)	銀約100貫500匁(1,675両)
家屋新築	50軒(貧しい者には無料で提供)	銀約42貫(700両)
広橋の建設		銀約24貫(400両)
築堤費用		銀94貫334匁(1,572両余り)
その他費用		銀111貫400匁(1,857両)
復興費合計		(6,204両＝約20億円)

日本銀行貨幣博物館が提唱している、金価格や米価ではなく、賃金で換算する方法で換算した。江戸時代中期に、江戸や大坂で腕の良い大工を雇えば、日当として約銀5.6匁だったという。今、同じような大工を雇うと3万円前後かかるであろう。これで換算し、銀60匁が小判1両の公定レートから、1両は現在の30～36万円になる。

年間4～5回の定期的な清掃活動や、必要に応じ会員が清掃・保全活動を行っている。校区内の小学校の児童も清掃活動に参加し、防災学習の一環として活動している。

・稲むらの火祭り

梧陵の遺徳と偉業を学び、末永く後世に継承すると共に地震津波への防災意識を高め、町づくりの活性化を図るために2003(平成15)年度より実行委員会が中心となって開催している。特徴は、広川町や広八幡神社ではなく、町民の「稲むらの火祭り実行委員会」が主催していることである。

これは、町民の盛り上がりによって支えられ、作り上げられてきたと言う経過がある。苦勞している点は松明づくりである。老人会の協力によって支えられ、高齢者の経験と知恵によって松明が改良を加えられ、現在に至っている。2011年度で9回目を無事開催することができた。

現在、役員が高齢になってきているという課題があるが、まだ地域のパワーは失われていないと感じている。この広川町で「稲むらの火を灯し続ける」と言う意味は、濱口梧陵の人命尊重の精神を受け継ぎ、伝承するということである。